

や やるぞ～ ま まけないぞ～ が がんばろうぜ～ た 楽しい学校になるように

見守らないけど見捨てない！

若い時分に、先輩の先生がしみじみと吐露してくれた、自分のお子さんが万引きをしたことに関する話である。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

もう既に成人している娘が、あれは小学校1年の時のことだ。「あれ、こんな消しゴム持っていたっけ？」妻（娘の母親）の何気ないその一言から幕は開けた。

娘は、母親が次から次へと繰り返す問いかけに、のらりくらりといろいろな説明を返していた。しかし、妻も中学校の教師として、これまであまたの生徒指導に対応してきた歴戦の猛者だ。優しく粘り強く丁寧に娘とやりとりを続けながら、少しずつ少しずつ娘の矛盾点をついていった。

まもなく「ママごめんなさい。店から黙って持ってきちゃったの。」娘が号泣しながら“落ちた”瞬間だった。

そばで二人のやりとりを聞いていた私も、途中から娘の万引きを確信したが、口を挟まないで良かったと思った。私だったら絶対に怒鳴り散らして認めさせていただろう。妻は、消しゴム一個を見逃さなかった眼力もさることながら、娘とのやりとりもさすがだった。終始冷静ににこやかに対応した。でも娘の顔をそらさずずっと射貫くように見ていた眼光の鋭さは厳しかった。そして、娘が認めた直後に、彼女も大粒の涙を流していた。

いやあ、あれには本当にまいった。妻も私も、親の立場として忘れられない、かなりショッキングな出来事だった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

自分が同じような状況に置かれたとしたら、「我が子に限って」と思う、あるいは、そう思いたい人がほとんどであろう。しかし、今なら私は決してそうならないと思う。教員として、「まさか、この子が」という件は何度も経験してきたからだ。

例えば、クラスの仲間や先生方など誰からも信頼され、地域でもいい子だと大評判だった生徒が、同じように万引きしたケースがあった。進路に悩んで精神的に不安定だったことが主な原因だった。

日頃の言動から、大人の自分なんかよりもよっぽど人格的に優れていると言ってもいいくらいで、よその子の保護者からも「立派な子」だと口々に言われていた教え子が、定期テストを繰り返し改ざんしていたこともあった。

テストを返却すると、採点に間違いがないかどうかと点数を確認するわけだが、毎回毎回いろんな教科で「先生、ここの答が合っているのに×になっています。」ということが、明らかに他の生徒より頻繁だったので、いろんな先生が不審に思っていた。

改ざんした事実が判明して理由を聞いた。成績は学年でもトップクラスだったのになぜ？と思ったが、90点は許せても89点は許せない。450点ならいいけど449点はダメ。親からかなりのプレッシャーを受けていたらしい。成績がいい子にはできる子なりの苦悩があったようだ。理由は納得できないわけではないが、やったことは身勝手に到底許されるべきことではない。

学校が保護者に連絡をとる時というのは、明らかに保護者にとって嬉しい話は極めて少ない。「体調が悪いので迎えに来てほしい。」「ケガをして念の為救急車を呼んだ。」そういった健康・安全面に関する連絡以外には、生徒指導上の話がほとんどだ。

親御さんが聞いていい気分にならない話は、こちらとしてもいい気分の話ではないので、できれば耳に入れないでおくことにこしたことはないが、そんなことはできない。学校でのトラブルは共有してこそ意味がある。だからそういう話を親御さんに連絡することは、連絡を受け取る親御さんもせつないだろうが、担任など我々教師にとってもせつないものだ。

そんな中たまに困ることがある。「うちの子に限ってそんなことはありません。」と事実を受け入れてもらえない場合だ。それもかなり感情的に。

しかし実際は、100%完璧な人間なんて存在しない。不可抗力や不注意の場合もあるので、間違いが絶対はないと断言できる生徒なんていないのだ。

あの告白してくれた先生だって、「お父さんもお母さんも学校の先生なのに、家でどんな躰をしてたんだろう。」なんて言われたら返す言葉は見当たらないだろう。でも、教師の子であれ、総理大臣の子であれ、農家の家の子であれ、裁判員の子であれ、警察官の子であれ、お医者さんの子であれ、会社員の子であれ、自営業の子であれ、過ちや失敗をすることは誰だってあり得るだろう。

もちろん、事実確認は正確に丁寧にやらなければならない。そこに瑕疵があったとしたら大きな問題だ。しかし、「我が子に限ってそんなことは絶対はない。」ということにはならない。

我々は、子どもを罰するために生徒指導をしているわけではない。何か法に反することや誰が考えても非常識な言動があれば、必ず誰かに迷惑をかけている、誰かが不利益を被っている、誰かが傷ついている、そして自分に決してプラスにならないということを気づいてほしいだけなのだ。そして、同じミスを今後決して繰り返してほしくないのだ。

保護者や先生方には、子どもがどんな過ちや失敗をしても、事実を共通理解しながら、慌てず焦らず常に冷静に受け止めて、子どものために最善な対応をしてほしい。その子が絶対に過ちを犯すはずがない、ということ信じることと、その子自身を信じることは違うのだ。

子どもたちは、やがて我々大人の手元から巣立っていくことだろう。その後いろいろな失敗や過ちを繰り返し、道に迷うこともあるかもしれない。今のように、ずっとそばにいて見守ることはできないかもしれない。でも、その子にとっていつまでも温かい存在である教師や保護者であり続けたい。見守ることはできなくても見捨てることを絶対にしない無二の存在として。